

母 校 通 信 (6 月 の 新 聞 報 道 よ り)

相馬高放送局 横山齋さん 15 植村理央さん 15

(※1)



番組の改良に向け意見を出し合う横山さん(右)と植村さん

震災・原発事故
12年

2人は震災と原発事故の起きた2011(平成23)年3月は3歳で、相馬市で被災した。植村さんは揺れに驚き、自宅近くの畑に逃げた記憶がある。横山さんは祖母の家だったが、詳しい状況は覚えていない。

処理水放出ラジオで問う

相馬市の高校1年生が東京電力福島第1原発事故を巡る課題の発信に挑んでいる。相馬高放送局の横山齋(いつき)さん(15)、植村理央さん(15)は放射性物質トリチウムを含む処理水の海洋放出を扱ったラジオドキュメント番組を制作し、放送コンテストの県大会で入賞した。7月の全国大会に進む。「被災地で暮らす自分たちが自分事として問題に向き合い、社会に伝えたい」と意気込む。

「社会に伝えたい」

記録番組制作、来月全国大会

NHK杯全国高校放送コンテスト県大会の各部門への出品作を話し合う中、横山さんはテーマを「処理水」に定めた。福島第1原発で出る処理水の行方に関心があったからだ。「地元には風評に苦しむ人が大勢いる。重要な問題なのに情報が広く行き渡っていない」。共感した植村さんと組み、部員らの協力を得ながら作品を仕上げた。作中では出版局が昨年度に1、2年生に行ったアンケートに触れ、海洋放出に賛成しないという政府や東電と県漁連の約束に関しては、放出賛成の人からも「理解を得る努力は続けるべきだ」との意見があった。漁業関係者は放出に伴うなりわいへの影響を危ぶむ思いを話してくれた。約7分間の作品の終盤には「安全であっても、理解を得ずに放出するのは反対する」とメッセージを入れた。横山さんは「原発事故に関する問題は今後も多くの人が考え、話し合う必要がある」と、植村さんは「原発の廃炉まで

は41%、「反対」は55%だった結果を紹介。意見の異なる生徒と教諭にインタビューし、賛否の理由を聞いた。国内外の識者にも話を聞き、別の処理方法や放出に対する海外の反応も盛り込んだ。取材や編集を通じ、多くの学びがあった。「関係者の理解なしにいかなる処分も行わない」とも復興が進む地域の様子や解決の難しい原発事故の問題を見聞させて育ち、相馬高で放送局に入った。解なしにいかなる処分も行わない」とも復興が進む地域の様子や解決の難しい原発事故の問題を見聞させて育ち、相馬高で放送局に入った。

(※1) 福島民報 6月26日(月)

(転載&※脚注 村山)